



日常はコロナの蔓延で一変。急ぎ足でやってきた少し先の未来を、世の中の消費を牽引する女性の視点から解説していきます。現場もがらり巡って、新たな気づきを発見するコーナーです。

在宅勤務で生活満足度アップ

在宅勤務が日常になった今、3回目は「住まいにおける欲望と変化」についてあれこれ考察していこうと思います。今回本音を聞いたのは、会社勤務から在宅勤務へなど、自身か家族に働き方の変化があった20代〜70代の女子104人です。果たしてどんな変化が起きているのか、暮らしを覗いていきましょう。



「昼間のリビングは天国」という声は今昔? 家族が日中在宅するようになった、「居場所がなくなった」という主婦も多いと聞きます。アンケートでは「自分の部屋はないけれどスペースを作った」という人は約3割いました。そんな中の「住まいの満足度」を聞くと、「満足」という人の割合は約41%と意外と高く、「不満」(約34%)を上回りました。通勤がなくなり時間にゆとりができ、家で

過ごす時間が増えたことで満足度はアップ、「家族をそばで見守れる」「会話が增えた」「家をキレイに、合理的に改善できた」ことが理由の多くに見られました。一方「不満」を作っている要素は、「仕事に子どもが邪魔してきた」「狭い自宅がますます狭い」「ひとりのスペース、時間が欲しい」などで、ストレスが溜まった人もいるようです。

コロナ禍で買った「仕事のモノ」と「趣味のモノ」

では、同じスペースの中でより快適に暮らすため、皆住まいにどんな工夫をしているのでしょうか。「思い切って家具を全て捨て、在宅勤務用家具をレンタルして、必要最低限の家具だけの心地よい空間に変えることに成功」(50代未婚)はひとり暮らしの成せる技でしょうか。在宅勤務が増えて購入した「仕事関係のモノ」は、1位・イヤホン、2位・パソコン・タブレット、3位・Wi-Fiなどの通信環境。「リラックスや趣味関係のモノ」は、1位・ネットフリックスなどの動画配信サービス、2位・室内運動のためのグッズ、3位・入浴充実グッズでした。場所をとるモノの購入にはなかなか踏み切れないのが現状ですが、イヤホンでひとり空間を作ったり、パーソナル背景を駆使したり、通信環境の改善をしたりと心地よく暮らす方法を探っているようです。



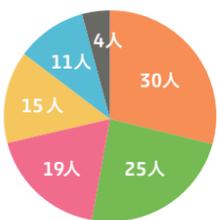
また、家で過ごす時間が増えて「新しく始めたこと」を聞くと、「犬を飼って散歩が日課に」「部屋を花で飾るように」「ハーブを育て始めた」「アロマを焚く」「小さなワイヤレスラーターを買って晩酌が増えた」などが挙がりました。生活の余裕と豊かさを感じます。「やめたこと」は「家事代行サービス」「荷物の再配達」

亜女子ブライ

昨年11月まではコロナ感染者は少数だったモンゴルですが、「現在は感染者が急増し大変なことになっています」とゾラさん。牧草地に住む遊牧民たちは悠々ですが、すでに60万人の国民はワクチンの1回目を打ったとはいえウランバートルは医療崩壊、交通渋滞が名物になっている街中も、ロックダウンで閑散としているとか。「在宅勤務になって変わったことは、家の中で毎日運動するようになった。母はパンを焼いたり、花を植えるなど新しい趣味ができて楽しそう」。人材派遣会社で日本語を教えたゾラさんも、コロナの影響でオンライン教師に転身。配達サービスやショッピングなどオンラインビジネスはとも流行っているようです。



コロナ禍でのあなたの生活時間の変化は?



- 全体的にのんびりしている
- 全体的に規則正しくなった
- あまりかわらない
- 全体的に忙しくなった
- 全体的に不規則になった
- その他

「コロナ禍における住まい欲」アンケート
 ●実施 : 2021年3月 ●調査対象 : 女の欲望ラボ会員200人中104人
 ●調査法 : オンラインアンケート ●調査対象 : (20代〜70代女性)

「子どもの学童保育、シッター」など。これらが物語るように、現在の生活時間は、「のんびりしている」という人が一番で、次は「規則正しくなった」でした。ライフスタイルがプラスに転じた人は多そうです。

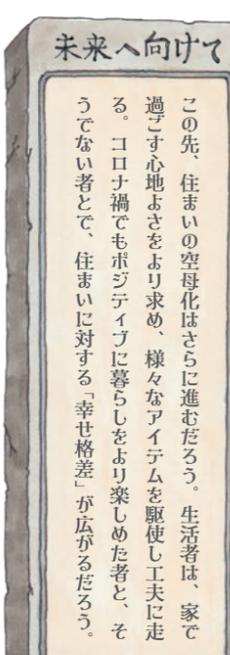
重視する住環境項目では、

「お風呂やキッチンなど住宅設備の充実」より「ネット環境のよい家に住みたい」という願望が上昇していました。納得。間取りについての考えの変化を聞けば、「一軒家に憧れる」「あと一部屋欲しい」「防音壁にしたい」「仕事場とを区切る渡り廊下が欲しい」など欲は尽きませんが、「家族に音を出さないで知らせるON AIRライトが欲しい」

「コンセントの位置を変えたい」「一番リラックスできる風呂場とトイレをリフォームしたい」といった意見は実現可能な範囲かもしれませんが、理想の住まいに関しては、「気持ちの切り替えがなにより大切。それができる空間があることが理想」という意見が多く、リアルな空間が無理でも、気持ちを切り替える工夫をしているように思いました。逆に「オンオフを曖昧にして、子どもにも仕事の話や相談をするなど大人の世界を子どもにオープンにするのもいいかなと思う」という意見も興味深いです。「より住環境やサービスを充実させたい」と考えるようになった」という意見が大半でした。

多機能になった住まいの行方

「快適な仕事場として」「おいしい食堂として」「身近なジムとして」「癒やし・娯楽の空間として」など、住まいの役割は、コロナを通してより多機能になりました。海や山など自然の多い場所での



誌面に掲載できなかった調査内容も、CELホームページで紹介予定 (<https://www.og-cel.jp/>)